The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ル・コルビュジエの建築環境デザインにおける「壁」
Author(s)	千代, 章一郎
Citation	デザイン理論. 2011, 56, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53501
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ル・コルビュジエの建築環境デザインにおける「壁」

千代章一郎／広島大学大学院工学研究科

1　はじめに

建築家ル・コルビュジエ（Le Corbuier: 1887–1965）の「壁」の概念に着目し，その内部と外部の境界面，とくに外壁形態のデザイン方法を場所環境との関連から検討することを目的としている。

一次資料としては，*Œuvres complètes, 1910–1965*, vols. 8, Les éditions d'architecture, Artemis, Zurich（以下『全作品集』と表記），*Le Corbusier Archives*, vols. 32, Garland Publishing, Inc. and Fondation Le Corbusier, New York, London, Paris, 1982–1984を用いている。

2　ファサードの類型

ル・コルビュジエは1926年，「新しい建築の５つの要点 Les 5 points d'une architecture nouvelle」の一つとして，「自由なファサード la façade libre」に言及している。さらにル・コルビュジエは1946年，外壁のデザインの系譜を自ら位置づける論文「日射しの問題 Promlèmes de l'ensoleillement」を発表している。これらの言説から，ル・コルビュジエのファサードは「水平横長窓」，「ガラス壁面」，「ブリーズ・ソレイユ」，「ロジア」，「クラウストラ」の５つに類型化できる。

3　ファサード類型の相関関係

これらのファサードの類型に準拠して，ル・コルビュジエの全作品を分析すると次のようになる。

(1)　「水平横長窓」は1920年初期から用いられ，1935年頃までの建築作品（とくに住宅作品）に多い。

(2)　「ガラス壁面」はすべての年代を通して見られるが，1940年以降，その形式はとくに公共建築作品において多様化する。

(3)　「ブリーズ・ソレイユ」は1930年代から用いられ，1940年～1964年の建築作品に多い。

(4)　「ロジア」は「ブリーズ・ソレイユ」の適用と同期である（但し，空中庭園を含めるとほぼすべての年代で用いられていることになる）。

(5)　「クラウストラ」は1950年以降から用いられている。

以上要するに，第二次世界大戦までのル・コルビュジエの建築作品では，(1)「水平横長窓」から(2)「ガラス壁面」へと伝統的な構造壁が否定され，新しい「壁」概念が二次元的な面として探求される。「壁」の否定としての(2)「ガラス壁面」は第二次世界大戦後にも継続的に探求されている。

さらに，(2)「ガラス壁面」は(3)「ブリーズ・ソレイユ」へと発展する。1930年代に始まる北インドにおける一連の建築計画案の制作に端を発し，第二次世界大戦後のインドの建築・都市計画案の制作によって，ル・コルビュジエは太陽の日差しの問題が西洋諸国で研究されたガラス壁面のファサードでは解決できないとし，(3)「ブリーズ・ソレイユ」が研究され，「壁」を肯定する(5)「クラウストラ」における光の主題を内包しつつ，「壁」の二次元的な面性を否定する(4)「ロジア」に発展する。これらは内部と外部の視覚的障碍としての「壁」の否定というよりも，内部と

外部の中間境域の創造もしくは「壁」の三次元的空間化であり，北アフリカやインドのみならず，欧米諸国でも適用されている。

一方で，ガラス壁面だけではなく，素材の追求として，1930年代頃からガラス・ブロックのファサードがやはり欧米諸国で研究されている。ファサードを構造的だけではなく，視覚的にも透明化することが「壁」の否定であるとするならば，外部と内部に固い境界をつくるガラス・ブロック壁面の重厚さは，面的な「壁」の肯定であると考えることもできる。それは中空ブロックを用いることによって，採光を主題とする(5)「クラウストラ」のファサード構成へと発展していく。「クラウストラ」はフランスで研究されたが，後にインドにおける建築作品にも適応されている。

以上のファサード類型の機能と敷地環境との相関関係を図化すると表１及び図１の通りである。

４　おわりに：「壁」の両義性

初期のル・コルビュジエの建築作品は，視覚的に透明なファサードを作り出すことによって伝統的な「壁」の概念を否定したが，1930年代から第二次世界大戦後にはファサードの質感を肯定的に捉え，しかし同時に面性を取り除く，現象的に解放的な新しい「壁」を創り出した。その典型はル・コルビュジエによって「ロジア」と記銘されたファサードの仕掛けであり，しかもそれは，ル・コルビュジエ自身によっては位置づけられていなかった「クラウストラ」の類型が，密接に関わりを持っている。

「ブリーズ・ソレイユ」に由来する「ロジア」は，北アフリカやインドの特殊な敷地環境，とくに太陽の日差しの問題を解決するために考案された新しいファサード類型である。ところが，それが敷地環境の異なる別の土地でも適応が試みられるのである。それは単に建築家の美学的要請の敷地への強制のみならず，本来個別的な敷地環境との関わりを普遍的に探究しようとする建築家の志向である。つまりそれは，建築家の内在的美学と環境の外在的要因の原理的な調停の試みであり，そのことが，ル・コルビュジエにおける「壁」の両義性をもたらしていると考えることができる。

ル・コルビュジエは敷地環境の特殊性とそれとは無関係なプロトタイプとしての建築の普遍性のあいだを不断に横断することによって，建築的な環境を創造していたことが，「壁」を巡る建築制作から考察することができる。

表１　ファサード類型の機能

	(1) 水平横長窓	(2) ガラス壁面	(3) ブリーズ・ソレイユ	(4) ロジア	(5) クラウストラ
敷地環境	○	○	◎ ○	○ ◎	○ ◎
環境的機能	室内採光	室内採光、室内温度調整、遮音	通風、日射遮蔽	日射遮蔽	採光の美的効果
年代	1910-1950	1922-1963	1933-1964	1914-1964	1945-1960

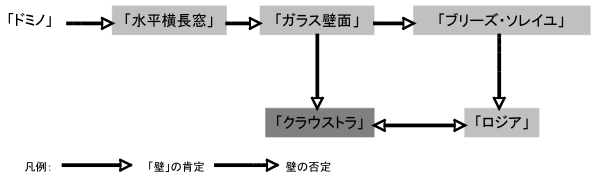

図１　ファサード類型の相関関係